

# 一九六四年度歴史研究会総括

高 田 俊 士  
藤 井 勝 俊

## (一) 概 観

時は森羅万象を超越して、ただひたすりに直進して行く。一方自然現象・人為現象は、その時の進展と共に更新されて行く。従つて、歴史研究会も又、年々更新向上されて行つて当然しかるべきである。しかしながら静かに昨年度の活動を振り返つて見るに、その更新向上の度合の余りの低さに嘆かれる次第で

ある。みよくな嘆息は、年々の総括に於て常に繰り返されてい  
る。又、しかし過去十数年の歴史研究会活動を全体的に眺め  
た場合、そこにはやはり連続的人為現象の故に、更新、向上が  
歴然たる事実として認められる。昨年度は、その更新、向上の  
基礎の上に立つて、クラス、クラブの二重構造、部会、期別の  
交錯等により必然的に生ずる進退的会員の存在や、各委員会等  
の組織の繁雑性の是正を、その活動方針とし、選ばれた役員・  
委員、送迎が会員相互の義務と責任の履行を促した次第である  
。この相互の義務の履行は、殊に後述する文化祭において、全  
会員に包括されなかつたと言え、集約的に果されたものと断  
定しうるのである。そして、この好ましい傾向性は本年度以後  
の活動においてその更新向上の度合を加速度的に増して行く可  
能性に結びつくものであり、又結びつけなければならぬ。か  
かる基本的態度の下に、後述する個々の具体的活動が、昨年度  
当初に立てた企画通りに大過なく果し終えたのであるが、基本  
的態度の確立し得た会員範囲も些少の故に、進退的会員の存在  
及び組織の繁雑性の是正の効果が上がらなかつた事実として、  
前述の如く更新、向上の低さは強調されるのである。

## (二) 部会活動

まず始めに各部会の活動を列挙し、その上で考察することに  
する。

●古代史部会——頼田庵寺址及び不之下古墳の発掘調査之行  
尚、頼田庵寺址の宅地造成に因りて、文化財保護・保存運  
動をアンピールする。鎌刃古墳、高倉山古墳の測量之行。

卒業論文や研究報告として、その成果が発表された個別研  
究を行つ。研究発表会を催す。朝熊山径塚、頼田庵寺、木  
之下古墳、半田弥生史料の整理之行。部会としての研究  
報告を各種機関紙に行つ。文化祭においては「発掘」と題  
して、ハミリ及びスライドの映写会を催す。その他。

●近世史部会——古文書史料講読を行つ。「近世農民生活史」  
をテキストに輪読会を行つ。法田紺屋文書の史料探訪を行  
つ。中村家大庄屋文書の万歳留目録を作成する。文化祭に  
おいては法田紺屋文書の史料展を行つ。その他。

●西洋史部会——十五期生担当による研究発表会を行つ。茨木  
先生の講演会を催す。ナシヨナリズム。テーマに種々  
の観点からの研究討論会を行つ。文化祭においては、拓本  
展示会を行つ。その他。

各部会とも多彩な活動がなされた。この限りにおいては何尋  
異論を欲む余地はない。しかし各部会を統轄する運営委員会及  
び構成員たる個々の立場から論ずれば、若干の問題点が存する  
。各部会の独自性ある活動は尊重されなければならぬが、各  
部会は運営委員会に財政的援助を仰ぐのみでよいのであろうか。  
なるほど各部会は、運営委員会の組織の中において研究発表や  
、機関誌「ふびと」への報告等を行つてゐる。文化祭において  
も各々の成果が発表されている。しかし個々の活動を全体とし  
て眺めた場合、それが如何にも散発的活動に終始してゐるよう  
である。何故そうなるのであろうか。運営委員会に目的理念、  
指導理念がないからである。指導理念の下に各部会の活動が統  
轄され、それによつて統一的成果があげられ、そこに概観で述

べだ更新向上の飛躍が見られるものと思われる。この試みは、一九六〇年度に城田地域総合調査と称して、すでに述べられている。「ふびと」への報告によるとそれが中座してしまつたようではあるが、要するにこの点に因しては、運営委員会の指導性の欠如が反省されなければならぬ。

次に個々人の立場から考察する。個々人が所属の部会に執着することは必要なことである。しかし歴史専攻生である以上、又将来社会科教師たれんとする者である以上、所属外部会に対して無関心であつてはならない。時間的制約内においてでもよいかい触れておく必要がある。触れれば少くともその知識は潜在化する。潜在化すれば無限の発展の可能性を有することになり、無知とは自ら異るものである。出来れば意図的に部会間交流をなす方策を考へられるべきであると思われる。

### (三) 講演会と研究発表会

歴史研究会の生命である研究活動が充実すればする程、報告の重要性が高まるものである。「ふびと」「日報」への報告は後述するとして、ここでは報告の一形態である発表会について述べるに留める。会員の歴史意識の高揚をはかるべく五月には家令先生に「海難文書について」、十二月には中田先生に「大庭御厨について」講演をお願いすることができた。我々会員として大いに啓蒙されるところがあつた次第である。学生側の研究発表会としては五月に、十四期柴田勝洋による「額田廃寺址について」を述べ、六月に同じく十四期高田俊士君、十一月に十五期、岡藤了憲君等々の研究発表が行われた。更に今年

業論文発表会が一月下旬から二月上旬にかけて、十三期生全員を種々の障害の故に、わずかに三分して、一回に引きとく八名という強行日程の下に催された。この種の会に対する参加者運営委員会当局が予測したよりも常に下回つていたことは、誠に憂うべき現象であり、又発表者に対する質疑応答が活発なかつたことは聴講態度に向題が芳らうと思われる。加ふるに卒業論文の発表者側も、四ヶ年間の学生生活の結晶の真価が向かわれるにしては、余りに感服がなざる発表態度であつたことは、非難されましかるべきである。要するに会員相互の研究活動行為に対する敬しさが失われているように思われる。無関心は無知に通ずるものであり、関心は発展の可能性を秘めているものである。従つて歴史研究会員の歴史研究活動に対する関心をより一層高めるべく努力が要求される次第である。

### (四) セミナール活動と社会学連

歴史研究会の基本方針として、自主的研究活動の促進と民主教育の擁護と発展の二大スローガンが掲げられてきた。セミナー活動及び社会学連活動は、これ又後述する自治会活動と共に、後者のスローガンに合致するものである。昨年度セミナー活動は社会科学各クラス（歴史・地理・法政・経済・哲倫）を統合して、その研究施設の改善要求と共に、社会科学教育の共同研究を目的とする社会科学学生連盟が結成されたのであるが、その社会学連との一対的行動をなす為、従来の歴史教育研究を保留して、我々に身近かに関連する僻地教育研究を、そのテーマとしてなされた。このセミナー活動は社会学連自体が誕生後、向

もないせいも、歴史研究会員及び社会科専攻生に対する啓蒙の不足の爲に、一部活動家のみの活動に帰してしまつた。やはり社会学連として独自の道を歩むべきであつて、我々歴史研究会のゼミナール活動は社会学連と連携しつゝも歴史教育研究という本筋を逸脱してしまふべきものではない。

### (五) 自治会活動

歴史研究会が、クラス・クラブとレクニ重構造を有しているが故に、自治会の下部組織として位置づけられるのは当然のことである。又現在の混迷せる社会の中にあつて我々が、現実の政治社会に対して鋭い反応を示すことも当然のことである。しかし自治会即治団体であるべきではない。自治会活動の一部として、政治的面が加味されていくべきである。従来は自治会執行部の指導力に動かされて如何にも政治団体的な性格が強かつた。そこで学内に関する、例えば施設の拡充、改善等、特別委員会として学内問題対策委員会を設置せられ、各クラスの委員がこれに當つた試みは、前述の欠陥を是正しえだかに見えたが、しかし、十一月に原子力潜水艦寄港反対運動が極限に達し、全学全ストに突入してしまつたことは暴走の感なきにしもあらずであり、扇動にうまく乗せられてしまつたといつても過言ではない。これは、高い関心を示されたにも拘らず、問題の本質を究明し反対運動の明確な展開への検討が余りにも不十分であつたからではなからうか。そして自治会の要請にもとづくクラス集会が、頻りに開催されることは、しかもそのテーマが常に政治問題に關与してゐるので、自治会執行部の強いリーダー

シップと各クラス間との間のギャップの故に、避避的会員が必然的に生じ、ひいては、歴史研究会独自の研究活動にも支障を来たすことになるのである。この建制的傾向は、全学的に認められる。そして、この傾向性の好ましい方向への是正は、ひとえに自治会各員の自治会に対する意識を高め、執行部のリーダーシップとのギャップをなくすことが先決であると考えらる。即ち自覚に訴へなければならぬし、又その爲の啓蒙を必ず必要があると思われれる。

### (六) その他

研究報告の場として、機関紙「ふびと」を七月、三月の二回発行した。内容の充実をはかるには、余りにも割り当て予算が少く、広告料でその不足を補つた。発行期日当初の予定より二ヶ月ずれてゐるのであるが、これは原稿提出がおくれたからである。又今こうして述べている総括なるものは、その年度内の最終号に掲載されなければ、その意義が半減せられるのではなからうか。

「月報」は、四五・六・七・十・十二各月号が刊行された。内容は主として連絡事項的なものばかりであつた。しかし書籍の寸評や紹介、史料解説など研究余録的なものが加えられれば、より充実した意義ある「月報」発行といふことになるであらう。名鑑委員会では、一期が十六期に至る歴史専攻生の名鑑を作成した。印刷物として頒布するには至らなかつた。そして総会案内状を送付した。細心の注意を払つたにも拘らず、先輩方より連絡不十分を指摘されてしまつた。誌上をかりて深く

お詫びすると共に、名簿の再検討を試みる必要を痛感する次第である。

図書委員会では卒業論文題目を区分けして、会員の研究の便宜をはかることにし、「ふびと22号」にそれを掲載した。当初の計画では、大学図書館に納められていた歴史関係書籍・史料の目録を作成することになつてしたが、各部会においても、その種の活動が行われているので委託することにした、しかしながらそれらを統合して盲点のない目録とする必要があるのである。

特殊的な活動としては、前述した如く「額田廃寺址」保存、文化財保存の署名運動を行つて、古代史部会が曲りなりにも発掘調査を行うことまでできた点があげられる。又北海道の冷害に鑑み地理クラスと共に主体となつて、冷害資金カンパを街頭に立ち行つた。

各期の活動につれて述べる。まず特徴的に言えるのは、前年度において盛んであつた各期独自の機関紙発刊が、わずかに卒業生を周辺にした十三期生の一刊のみであり、それに反して、北海道旅行が十四期・十五期共に実施されたことであろう。思考よりも実践を尊んだとも言えようか、各期に共通した事柄としては、レクリエーションとして各期対抗球技会を催した事、文化祭前夜祭に仮装行列に参加した事、体育会において、飯尾・伊藤・大西・大沢・四君の活躍によつて輝く優勝をとげた事、春秋のエクスカージョンとして、法隆寺・室生寺遊歩を試みた事等々があげられる。最後に付言しておきたい事は、新入生である十六期生に積極果敢性のなかつたことは、運営委員

会側の指導性の欠如として深く反省する次第である。財政面としては、歴史研究会の複雑な構図の故に、又物価の上昇ということもあつて、規模が拡大している点もあげられる。従つて予算の配分等が非常に難しくなつてきている。更に一段と拡大されるならば、会計監査を置く必要も考慮しなければならぬかも知れない。

#### (七) 結び

以上述べてきたことによつて、昨年度の活動及びその考察が十分に把握されるものと思ふ。従つて最後に、新年度運営委員会に付言するとするならば、過去の成果に立脚しつつ、新しい創造性に満ちた、瑞々しいユニークな活動によつて、更新・向上をはかられんことを願うのみである。

以上